

はじめに

佐野 まさき

本号は、プロジェクトBⅡ「言語と文化」の特集号を兼ねている。研究成果の報告となる論文が考察の対象としている言語や現象は多様であるが、同時に、その切り口も理論中心のものからデータ中心のものまでさまざまである。

このように、理論や興味の対象を異にする者同士がひとつの集団で研究しあうという現象は、日本の言語学の社会では珍しくなく、ひとつの文化的現象とさえ言えるかもしれない。これとは逆に、考え方や興味を共有する者同士しか集団化しないというような社会は、国の内外を問わずいくらでもある。

どちらがいいかということを経験的違いから判断することはできない。大切なのは、人はそれぞれ考え方が違うという現実をどのように生かすかである。理論を異にする者同士が形の上で同じ集団にいるからといって、何のコミュニケーションもなければ、相手の考え方を理解することはできず、まして切磋琢磨することなどできない。逆にひとつの理論や考え方で集まっている集団でも、他の違った集団と積極的な意見の交換の場を持てば、違った世界を見ることができるだけでなく、自らを客体化し相対化することにより、より普遍的な思考へと向かうような可能性も開ける。

もちろん、切磋琢磨とか普遍的な思考とか、そんな立派なことをはじめから求める必要はない。せかく自分とは違う人がいるのだから、何かを聞いて得てしまおう、それくらいの気持ちでじゅうぶんである。

私事になるが、最近高校時代の友人のメーリングリストに入れてもらう機会があった。もうとっくに社会人になった者同士で、しかもその職業はさまざまであるから、出てくる話題もさまざまである。個

人同士のメールのやり取りではないからそのまま読み捨ててもよいのであるが、誰かが何かを言い出すとそのテーマについてすぐに何人かの者が反応し、しかも連鎖的に話から話へかなりの期間にわたって続くのは、こういう経験をしたことのない者には驚きだった。「スレッド」という言葉があるくらいだから、このようなことはメーリングリスト上では普通のことなのであろう。たとえば建築家が、お子さんに高校の化学を教えていて疑問に思った原子の問題をいったんメール上に出すと、それから話が鉄に及び、鉄から「日本アパッチ族」にまで広がったりする。原子の話にチンプンカンプンで、それも今となっては危機感も持たずただ読み捨てていた私も、「日本アパッチ族」が何のことか分からないのはさすがに取り残された気がして、メールを開いたついでにインターネットで検索してみる。するとそれが小松左京氏の同名の小説で、鉄を食べる人間の話だということが分かる。まだその機会には恵まれていないが、いつか書店などでこの小説に出会えば、きっと手にとって見てみることになるだろう。知らないままですら決してなかったはずのことである。

狭い学問の世界でも似たことは起こり得る。学会などでたまたま聞いた発表で、たとえそのほとんどが分からなくても、参考文献表で新しい情報が見つかっただけでも得した気分になる。自分のテーマに使えるようなデータでも出してくれればもうけものである。不思議なことに、自分が拠っている理論とは離れている研究発表に対してのほうが、このようなもうけものをしたという感覚を持つことが多い。

本特集号が、多様な研究者がいる中であって、多少ともこのような知的刺激を与えることができれば幸いである。